

ムネーメと教育：「モンテッソーリ・メソッド」におけるリヒャルト・ゼーモンの位置

福元, 圭太
九州大学大学院言語文化研究院：教授

<https://hdl.handle.net/2324/7324197>

出版情報：かいろす. 62 (別冊), pp.56-72, 2024-10-31. かいろす同人
バージョン：
権利関係：



ムネーメと教育

—「モンテッソーリ・メソッド」におけるリヒャルト・ゼーモンの位置—

福 元 圭 太

(Keita FUKUMOTO)

(Kairos 62)

Kairos-Gesellschaft für Germanistik

Fukuoka Japan 2024

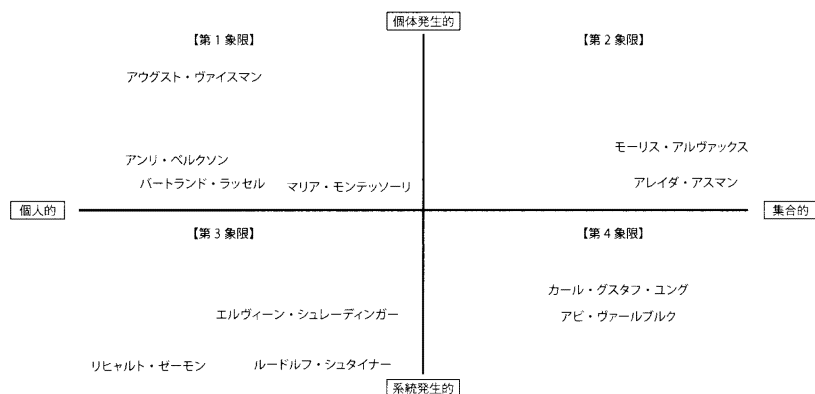
ムネーメと教育

— 「モンテッソーリ・メソッド」におけるリヒャルト・ゼーモンの位置 —¹⁾

福元圭太

0. はじめに

本稿はリヒャルト・ゼーモン (Richard Semon; 1859-1918) の「ムネーメ理論」²⁾に関する一連の研究の一部を構成する。記憶に関するゼーモンの「ムネーメ理論」と、その思想的影響関係を分析するなかで、著者は次のような縦軸・横軸からなる四つの象限を用いれば、記憶をめぐる20世紀以降のディスクルルス全体の見取り図が明確になるのではないかと、という着想を得た。³⁾



1) 本稿は科学研究費補助金基盤研究 (C)、課題番号20K00499、研究課題名「物質に宿る記憶——リヒャルト・ゼーモンの「ムネーメ理論」研究」の一部である。補助に対し、衷心より感謝申し上げる。

2) この理論の概要については、本誌掲載の別稿、福元圭太：「『中立的一元論』と「ムネーメ理論」——バートランド・ラッセル『心の分析』におけるリヒャルト・ゼーモンの位置——」注19を、詳しくは福元圭太：「記憶、エングラム、エクフォリー：ヘーリングからゼーモンへ」『言語文化論究』第48号所収、九州大学言語文化研究院、2022年、17-34頁 (https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_detail_md?reqCode=fromlist&lang=0&mode=MD100000&bibid=4773108&opkey=B172257914820379&start=1&listnum=1&place=&totalnum=6&list_disp=20&list_sort=0&cmode=0&chk_st=0&check=000000) を参照されたい。

3) この4象限の図は、前稿「『中立的一元論』と「ムネーメ理論」——バートランド・ラッセル『心の分析』におけるリヒャルト・ゼーモンの位置——」を踏襲したものである。

本稿では、上図の第1象限に含まれるマリア・モンテッソーリ (Maria Montessori; 1870-1952) を取り上げる。モンテッソーリを配置した第1象限は、記憶は個人的なもので、その個体の生存中のみ存続し、系統発生的に遺伝されない、という立場である。⁴⁾

本稿の目的は、モンテッソーリが開発した教育法であるいわゆる「モンテッソーリ・メソッド」にゼーモンの「ムネーメ理論」がどのように援用されているかを分析し、ゼーモンの後世への影響の一端を詳らかにする点にある。

1. 「モンテッソーリ・メソッド」の概要⁵⁾

イタリア人の教育家マリア・モンテッソーリは、子どもを注意深く観察することによって、独自の「モンテッソーリ・メソッド」を確立していった。モンテッソーリが採用した原則はシンプルで、「子どもと大人は違う」(松2)⁶⁾ というものであった。

人間が大人として完成するのは、モンテッソーリによれば、24歳頃である。そこに至るまでの時間は、同じ長さで4段階に区切られる。第1期は0歳～6歳、第2期は6歳～12歳、第3期は12歳～18歳、第4期は18歳～24歳である(松3)。モンテッソーリによれば、それぞれの時期のみに発達する能力があり、それを伸ばしてやることこそが、大人の教育者の責務なのである。

「モンテッソーリ・メソッド」が生まれた契機を、彼女の生涯から探ってみよう。モンテッソーリがイタリア中東部、アドリア海に面したアンコナ州キアラヴァッレで生まれた1870年は、イタリアが国家として統一された年に当たる。1952年にオランダで没。82歳であった。モンテッソーリが自らの最初の専門教育施設「子どもの家」を創設したのが1907年、ローマ中央駅であるテルミニ駅の裏手にあった貧民街の中であった。

モンテッソーリは初め医学を学んでいる。名門ローマ大学医学部でただ一人の女子学生であった彼女は、同学科から輩出されたイタリア最初的女性卒業生となっ

4) もっともモンテッソーリは、ゼーモンの「系統発生的に遺伝される本能もまたムネーメの一種である」という考えを否定しているわけではない。しかし人間において「記憶が遺伝する」とは主張していない。

5) 本節におけるモンテッソーリの伝記的記述、「モンテッソーリ・メソッド」の概要等のほとんどすべては、以下を参照した。松浦公紀：『モンテッソーリ教育が見守る子どもの学び』学習研究社、2006年初版第3刷(初版第1刷は2004年)。本節はその主要な部分を大幅に切り詰めて要約したものである。モンテッソーリ教育に関する他の概説書もいくつか瞥見したが、もっともコンパクトで分かりやすかったのが、松浦の記述であった。

6) 以下注5に挙げた松浦からの引用は(松2)のように書き、本文中に挿入する。(松2)は上掲書2頁を表す。

た。⁷⁾ 彼女は教育家となったのちも生涯「ラ・ドットレッサ」(松13) (la dottoressa: 女医さん) と呼ばれていたらしい。モンテッソーリは、医師が概してそうであるように、科学的に子どもを観察し、その子どもにとっていつ何が必要なのかを処方するかのように、独自のメソッドを開発していった。

モンテッソーリが教育家へと変貌する契機は、ローマ大学付属聖ジョバンニ病院に助手として勤務していた際に訪れた。ローマ市内のある精神科病院を視察したおり、彼女は発達遅滞児童たちが1か所に収容され、厳しい監視下に置かれているのを目撃する。子どもに対する嫌悪感をむき出しにする監視の女性に、モンテッソーリは、なぜそのような対応をするのかを尋ねる。答えは「なぜって？食事がすむと、この子らはすぐに床をはいずりまわってパン屑をあさるんですからね」(松15) であった。

モンテッソーリは、子どもたちが食後にパン屑を拾い上げるのは、食欲を満たすためではなく、「手を使うことによって到達する内面の満足感を本能的に求めているのではないか」(松15) と考える。子どもたちは、パン屑を見つけるために感覚器官である目を使い、見つけたパン屑に腕を伸ばして指先でつまみ、落とさないように口元に運ぶ。これはつまり、感覚から運動へという活動への欲求ではないか、と考えたのである。

この経験をきっかけにモンテッソーリは、発達遅滞児童の教育のために、例えば様々な図形の「はめ込みパズル」のような、感覚から運動への動きを伴う用具(「モンテッソーリ・メソッド」ではこれはのちに「教具」と呼ばれるようになる)を使い始め、やがては医療と教育が合体した「療育」⁸⁾(松16) システムが構築されることになる。

「モンテッソーリ・メソッド」では、子どもがもともと持っている、自立していこうとする能力を助け、それを伸ばすことが基本的な方針となっている。この能力をモンテッソーリは「自己開発力」、「自己教育力」ないしは「自己成長発達力」(松28)と呼んでいる。モンテッソーリは、子どもがある特定の時期に特定のことに集中し、強い感受性を示す事実を観察していた。のちに様々な能力を自己開発していくために、爆発的な精神的吸収力が発揮されるこの時期は、「敏感期」(sensitive period)と呼ばれる。それは、生物学的な側面からも、特定の能力や機能の獲得に必要なものを吸収するにあたって、きわめて重要な時期であるとされる。「敏感期」という用語は、オランダの生物学者で植物学や遺伝学を専門とす

7) モンテッソーリの学位請求論文のタイトルは「被害妄想の研究に関する臨床的寄与」である(松14)。彼女の関心は精神科の領域にあった。

8) 松浦は英語を挙げていないが、「教具」は didactic materials, 「療育」は therapeutic education または therapeutic intervention である。

るド・フリース (Hugo Marie de Vries; 1848-1935)⁹⁾ に由来する。ド・フリースとモンテッソーリは1917年に直接知り合っているが、前者の勧めにしたがいモンテッソーリは、「敏感期」という用語を自らのメソッドに取り入れたようである (松34)。以下、「敏感期」に蓄えられる能力 (言語, 秩序, 小さいものへの関心, 感覚, 運動, 数, 文化, 礼儀と作法) について手短かにまとめる。

モンテッソーリは「言語の敏感期」を二つに分け、「話し言葉の敏感期」を「7 か月目の胎児期～3 歳前後」, 「文字に対する敏感期」を「3 歳半～5 歳半」とした。興味深いのは、胎児がまだ子宮の中にいる生前から、「話し言葉の敏感期」が始まっていることである。子宮内の胎児に話しかけるという一種の「胎教」は効果があると考えられているのである。この「話し言葉の敏感期」に子どもの環境に存在している言葉が、その子どもの母語になるとされる (松37)。「文字に対する敏感期」については、さらに下位分類として「書くことへの敏感期」と「読むことへの敏感期」(松38) があるという。

「秩序への敏感期」は、物が収まる場所や物事の順番に関するもので、「6 か月～6 歳前後」がそれにあたる。

「小さいものへの敏感期」は、小さな虫やちょっとした洋服のシミ, 「年配者の数本だけ混じった白髪など」(松40) への関心に関するもので、「2 歳～3 歳前後」に来るという。

重要なものとして「感覚の敏感期」がある。これは二つに分かれており「感覚の探求と蓄積」が「0 歳～3 歳」, 「感覚印象の整理・分類・秩序化」が「3 歳～6 歳」に生じるという。この時期にいわゆる五感 (視覚・聴覚・嗅覚・触覚・味覚) が発達する。

「運動の敏感期」もまた二つに分かれ「運動機能の発達」が「0 歳～3 歳」, 「運動の洗練と調整」が「3 歳～6 歳」に起こるとされる。

「数の敏感期」は「4 歳～5 歳」に現れるが、これは自分の年齢や日付へのこだわりだけでなく、風呂の中で数を数えたり、車のナンバープレートを読んでみたり、という行動が現れるという。

さらに、モンテッソーリに独特なものとして「文化の敏感期」というものがある。これは動物や花の名前, 世界の国々, 宇宙など, 生物・地理・地学など言語・数学以外のものへの関心が発達する時期で、「6 歳～9 歳」とされている。

興味深いのは「礼儀と作法への敏感期」があるとされることで、この時期に人間の社会生活を円滑に営む準備がなされるという。これは「3 歳～6 歳」と設定

9) フリースはまた、「突然変異」(Mutation) という概念と用語の生みの親でもある。

されている。¹⁰⁾

モンテッソーリはまた、主な「敏感期」にしたがって、教育の5分野を設定している。それぞれの分野では様々な「教具」が用いられ、各々の「敏感期」に合わせて子どもの能力の開発と伸長が図られる。

1. 「運動の敏感期」に行うべき「日常生活の練習」

ここでは自分の意志通りに動く身体を作り上げることが目的とされる。

2. 「感覚の敏感期」に行うべき「感覚教育」

ここでは幼児期ならではの旺盛な吸収力である「無意識的吸収精神」(松73)を満たす環境が整えられなければならない。「モンテッソーリ・メソッド」ではこの「感覚教育」が中核的な位置を占めることになる。この分野での「教具」は五感別になっており、例えば視覚については様々な色や形の積木のようなもの、触覚については熱さ・冷たさを感じることができる「温覚筒」や「温覚板」、また反発力を感じることのできる「圧覚筒」、聴覚に関しては音の強弱レベルを感じることのできる「雑音筒」、味覚については多様な味をつけた「味覚びん」、嗅覚についてはいろいろな臭いのする「嗅覚筒」が用いられる。現実においては複数の感覚が同時に刺激されることが多いが、五感をそれぞれ個別に刺激するよう工夫されたのがこれらの「教具」である。たとえば目隠しをして視覚を遮断してから特定の臭いを嗅がせる、といった方法がとられる。

また「感覚教育」の基本操作法も確立されている。それらをメソッドで用いられている略号とともに示せば、

①ペアリング (P) : 二つのものを比べること

②グレーディング (G) : 三つ以上のものを順位づけること

③ソーティング (S) : 三つ以上のものから同じ性質のものを揃えて分類することとなる。モンテッソーリは感覚教育を「すべての教育の基礎である」(松83)と位置づけ、その重要性を強調している。「感覚教育」で用いられた上記①P②G③Sの方法を援用して、言語教育、算数教育、文化教育における能力の開発と伸長が達成されると考えているのである(松85)。

3. 「言語の敏感期」に行うべき「言語教育」

言語に関し、子どもが親から受け継ぐのは言語習得の能力だけであって、どの

10) 「敏感期」に関することではないが、興味深いのは、モンテッソーリが、子どもは「遊ぶ」ことよりも「お仕事」を好むという観察をしていることである。「お仕事を通じて学ぶ」と言い換えてもよいであろう。松浦公紀は「日本の幼児教育界はフレーベルの影響を強く受けてきたので、子どもの最高の活動は『遊び』だと盲目的に信じられて」きた、しかるに「『遊び』という活動の中にある『学び』を見極める必要」が重視されるにいたった。松浦は、遊びの中にある学びとは何かという問いに対する「答え、もしくは答えにつながる重要な主張がモンテッソーリ教育の中には存在する」(松49-50)と力説してる。

言語が母語となるかは、生後の環境による。モンテッソーリはまずその子どもの母語による「話し言葉」の教育から始め、次に「書き言葉」へ、次いで「文法」の習得、最後に「文章構成」へという、系統的なシステムを提案している。幼児期にもいわゆる「文法」を扱うが、それは「物の名前を表す言葉は名詞」、「動作・動きを表す言葉は動詞」といったものである。「モンテッソーリ・メソッド」における言語教育の目標は「母語を正確に理解し、母語で表現する能力を養う」(松98)ことに置かれている。¹¹⁾

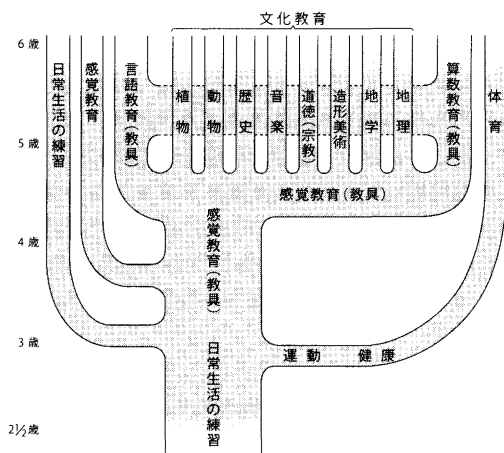
4. 「数の敏感期」に行うべき「算数教育」

モンテッソーリは「算数教育」を三つの要素に分けている。「数量」そのもの、それを言い表す「数詞」、そして数詞を書き表す「数字」の三つである。これらを用いて、十進法による数の概念が導入され、加減乗除の練習が行われる。「算数教育」の目標は、子どもが日常生活で漠然と接している数量を「論理的に数量概念として」(松114)認識し、算数を体系的に学ぶ点に置かれている。

5. 「文化の敏感期」に行うべき「文化教育」

「文化教育」をモンテッソーリは「宇宙的教育 (Cosmic Education)」とも言い換えている。「文化教育」に

は生物、地理、地学、歴史、道徳(宗教)のみならず、音楽、体育、造形芸術の学習も含まれている。6歳までの幼児期に多種多様な分野の学習が提供されるので、少し早すぎるし、内容も多すぎるのではないか、という反論もあるという。モンテッソーリの方針はしかし、吸収する力が最も旺盛な幼児期に「なるべくたくさん種をまこう」(松



松浦公紀による「モンテッソーリ・メソッドの概念図」¹²⁾

11) 日本においては幼児期から英語を覚えさせようとする風潮があるが、それが日本語環境に置かれている子どもの母語形成にとって望ましいことなのかどうかについては、議論がある。「バイリンガル」にならず、母語も外国語も中途半端な「セミリンガル」になってしまう危険性を排除できないからである。モンテッソーリの「言語教育」の目標が母語の正確な理解と、母語による表現能力の涵養であることは、ひとつの見識であると思われる。

12) 松浦公紀：『モンテッソーリ教育が見守る子どもの学び』上掲書、116頁から転載。

133) という点にある。まさにこのまかれる「種」とゼーモンのムネーメとの関係を、次節以降で、モンテッソーリのテキストから探っていこう。

2. ムネーメとホルメ

本節では、モンテッソーリ晩年の二つのテキスト『新しい世界のための教育』ならびに『人間の可能性を伸ばすために』に順次当たって、第1節で見た「モンテッソーリ・メソッド」において、ゼーモンの「ムネーメ理論」がどのような位置にあるのかを定位する。その際、「モンテッソーリ・メソッド」において「ムネーメ」と並ぶもうひとつの鍵概念である「ホルメ」にも触れる。

2-1. 『新しい世界のための教育』

【ムネーメ】

モンテッソーリはその著書『新しい世界のための教育』(*Education For A New World*)¹³⁾で、上記の「幼児期ならではの旺盛な吸収力である『無意識的吸収精神』」(松73)とムネーメとは同義であると言っている。ゼーモンの「ムネーメ理論」はこの「無意識的吸収精神」の生物学および心理学的根拠として援用されているのである。

大人は、ひとつの環境を高く評価すれば、それをそのまま保つかもしれません。しかし子どもは、環境を無意識のうちに吸収し、それを糧として、自分の精神 (psyche) の一部を形成することができるのです。それゆえに子どもは、言葉がそうであったように、見たり聞いたりした事を自分自身の中で肉体化し (incarnate)、それによって真の変身 (transformation) をなしとげるのです。この種の記憶を心理学者たちはムネーメ (the Mneme) と呼んでいます。¹⁴⁾

「この種の記憶」であるムネーメはしかし、良質なそれが幼児期に与えられないならば、人間形成はうまく行かないとされる。これはいささか決定論的な考え方

13) Maria Montessori: *Education For A New World*. Kalakshetra, Madras (India) 1946. モンテッソーリの講演を書き起こしたこの初版はわずか100部限定で、コピーを布製本したものであった。本稿で使用したのはこの版ではなく、下記の邦訳が使用している版である。Maria Montessori: *Education For A New World*. Association Montessori Internationale. Clio Press Ltd., Amsterdam 1989. 邦訳：マリア・モンテッソーリ：『新しい世界のための教育——自分をつくる 0歳～6歳』関聡（訳）、エンデルレ書店、2008年（初版第4刷）（1992年初版第1刷）。訳文は邦訳を参照したが、1989年版のオリジナルに基づき新たに訳出した部分が多い。

14) Maria Montessori: *Education For A New World*. 1989. a. a. O., S. 22.

であると言わざるをえない。¹⁵⁾ モンテッソーリに拠れば、十分な睡眠をとらず、目を覚まして泣き続けたり、絶えずうなされていたりする子どもには「退行」(regression)の傾向があり、また一人にされるのを恐れて過度に母親に密着する子どもは「抑鬱的で臆病な」性質を持っているとされる。そのような子どもは「生存競争のなかで他者よりも劣っていることは明らか」であって、「喜びや勇気や正常な幸福を得ることはできない」¹⁶⁾ だろうとまで言われるのである。これらは

潜在意識的な精神 (the sub-conscious psyche) による恐ろしい結果です。私たちは意識的な記憶としては覚えていませんが、ムネーメに刻み込まれた印象は、その個人の特性として深くとどまります。そこに人類に対する大きな危険があるのです。¹⁷⁾

なぜ人類に対する危険なのか。それは、適切な世話を受けなかった子どもは「弱い人間に成長」することによって、それゆえ「文明の進歩の障害」になることによって、その「社会に復讐する」¹⁸⁾ ことになるからだ、とモンテッソーリは言うのである。

【ホルメ】

退行的で抑鬱的、臆病な性質とは反対の、強い独立志向と、自らを発展させようとする意志への衝動を持つ子どももいるという。モンテッソーリはこのような衝動を生む活力に「ホルメ」(Horme)という概念を与えている。ホルメは「すべての生命に属する」もので、「進化 (evolution) のために働く神の力 (a divine force) のような」ものであり、正常に発達する子どもに見出される「集中や幸福、『生命の喜び』」¹⁹⁾ を指すという。これについては以下の『人間の可能性を伸ばすために』で、より詳しく検討する。

15) 例えばブリギッタ・フックスもモンテッソーリの決定論的な見方を批判している。モンテッソーリが子どもの教育に関する「神経科学的研究のパイオニア」であり、「生物学的構成主義 (biologisch[er] Konstruktivismus) の創始者」ではあっても、他方ではそれが彼女の限界をも示しているとする。Vgl. Brigitta Fuchs: *Maria Montessori. Ein pädagogisches Porträt*. Beltz Verlag, Weinheim und Basel 2003. S. 150.

16) Maria Montessori: *Education For A New World*. 1989. a. a. O., S. 26.

17) Ebd., S. 26.

18) Ebd., S. 26.

19) Ebd., S. 27. なお邦訳書の訳者である関聡は evolution を「成長」と訳しているが、後出のベルクソンとの関係から、ここは「進化」と訳すべきであろう。モンテッソーリに進化論的な思考が見られることは、良好なムネーメ形成に失敗した子どもは「文明の進歩の障害」になりかねないといった社会ダーウィニズム的な言説から垣間見える。

2-2. 『人間の可能性を伸ばすために』

『新しい世界のための教育』の続編である『人間の可能性を伸ばすために』(*To Educate The Human Potential*)²⁰⁾でモンテッソーリは、ゼーモン・ムネーメをかなり詳しく論じている。「無意識についての新しい心理学」と題された本書第3章でモンテッソーリは、そのような心理学の「三つの主要な精神的要素」を挙げているが、その第一の要素がムネーメ、第二の要素がホルメ、第三の要素が「観念の連合」(Association of Ideas)ないし「思考の継続的形成の原理」である。これらは「下意識の…迷宮 (labyrinth of the subconscious mind) の中の三つの重要な要素」²¹⁾とされている。この三つの要素を順次見てみよう。

【ムネーメ】

モンテッソーリによれば、心理学はいまや「無意識的精神 (the unconscious mind)²²⁾を観察し、生活上の現実と精神の関係を見出すために、その秘密を綿密に探ろうと」²³⁾している。端的に言って、その秘密がいわば格納されているシステムがムネーメに他ならない。²⁴⁾あるいはムネーメはひとまず、「記憶としての無意識」そのものと換言することもできよう。

現代の心理学に拠れば、人間はその「無意識または下意識 (the unconscious - or subconscious) があらゆることを覚えて」いて、そのためいまや記憶はひとつの大きな神秘の様相 (the aspect of a vast mystery) を呈している」²⁵⁾とされる。この「下意識の可動性 (mobility)」は非常に広く、そこにはあらゆることが記録されている。例えば「種族の記憶」(a racial memory)によって生物はその種を繁殖させ、生活様式を永続させるという。例えば鳥はその種族に特有の巣作りをするが、「こ

20) Maria Montessori: *To Educate The Human Potential*. Kalakshetra, Madras (India) 1948. 注13に挙げた *Education For A New World* の続編で、同じくモンテッソーリの講演を書き起こしたものである。本稿で使用したのもこの版ではなく、後述の邦訳が使用している版である。Maria Montessori: *To Educate The Human Potential*. Association Montessori Internationale. Clio Press Ltd., Amsterdam 1989. 邦訳：マリア・モンテッソーリ：『人間の可能性を伸ばすために——実りの年6歳～12歳』田中正浩（訳）、エンデルレ書店、1992年（初版）。訳文は邦訳を参照したが、1989年版のオリジナルに基づき新たに訳出した部分が多い。

21) Maria Montessori: *To Educate The Human Potential*. 1989. a. a. O., S. 14.

22) ここでは psycho ではなく mind が使われているが、二つの邦訳書とも「精神」と訳している。心理、心、精神、魂等々の訳し分けは大変難しく、一人の筆者によっても明確に使い分けられていない場合も多い。モンテッソーリの場合も術語の使い分けは曖昧である。本稿でも両方とも「精神」と訳出することにする。

23) Maria Montessori: *To Educate The Human Potential*. 1989. a. a. O., S. 12.

24) モンテッソーリは、ゼーモン同様、この能力が人間にのみ限られたことではなく「あらゆる生物に当てはまる」(Ebd., S. 13.) としている。

25) Ebd., S. 13.

の偉大な記憶は『ムネーメ』と呼ばれる」²⁶⁾とされる。ムネーメが存在するがゆえに、人間の子どもたちは「無意識のうちに人間の話し声を認知し、それを模倣するために、これらの音声を保持する」²⁷⁾とも言われている。意識することができ、言明することのできるいわゆる「記憶」は、氷山の一角に過ぎない。

ムネーメのごく些細な部分だけが、意識の領域に浸透しますが、その部分がいわゆる「記憶」というものなのです。この意識の中に入って来るごく些細な部分だけでなく、個々人が生活の中で経験するあらゆることが、ムネーメの中に保持されるのです。²⁸⁾

モンテッソーリは、ここで「無意味つづり」を覚えさせる「心理学の簡単な実験」に言及する。「無意味つづり」を一度覚えたのち、二、三日後に同じことを繰り返せば、最初のときよりも短時間でそれを覚えることができる、という結果を導き出した実験である。モンテッソーリは誰の実験が明記していないが、これは明らかに、「忘却曲線」で知られるエbbingハウスの実験²⁹⁾である。この再記憶の時間を節約できる現象は、「無意味つづり」がムネーメとなって無意識に蓄積されたからである、とモンテッソーリは解釈している。

ムネーメの中に残っているのは、記憶の蓄積ではなく、一度意識からこぼれ落ちてしまった経験を、意識的記憶へと呼び起こすひとつの力なのです。³⁰⁾

モンテッソーリは、例えば学校の教科内容を何も記憶していなくても、忘れてしまった教科内容を再度学習すれば、ムネーメによってそれを素早く理解できる

26) モンテッソーリはここではゼーモンにしたがって、動物の本能もムネーメであるという説をとっており、本能が遺伝するのであればムネーメも遺伝する、という主張に同意しているように見えるが、人間に関しては幼児期の個々人のムネーメ獲得がその個々人ののちの発展にとって決定的であるという点のみを強調しているので、冒頭の4象限図では、記憶を個体発生的であるとする位置に配した。

27) Maria Montessori: *To Educate The Human Potential*. 1989. a. a. O., S. 13.

28) Ebd., S. 13.

29) エbbingハウスが1880年から1885年にかけて行った実験で、一度記憶した内容を再び完全に記憶し直すまでに必要な時間（または回数）をどれくらい節約できたかを表す割合である節約率をグラフ化して、いわゆる「忘却曲線」を導き出した。Vgl. Hermann Ebbinghaus: *Über das Gedächtnis. Untersuchungen zur experimentellen Psychologie*. Duncker & Humblot, Leipzig 1885. 近年日本では、これを応用した受験勉強法などが盛んに行われ、「忘却曲線アプリ」で暗記や復習のタイミングを管理することも流行している。

30) Maria Montessori: *To Educate The Human Potential*. 1989. a. a. O., S. 13.

ようになると言う。それは「ムネーメの中に残された教科の痕跡」であり、そのような痕跡は「エングラムとして知られている」³¹⁾とする。知的能力の涵養にあたって「モンテッソーリ・メソッド」では、意識的記憶よりも、ムネーメを利用しようとする。ふつうの学校とは異なり、「この事実を利用することによって、…知的能力が増大するように」³²⁾工夫されている、と言うのである。先述したように、吸収する力が最も旺盛な幼児期に「なるべくたくさんの種をまく」ことが「モンテッソーリ・メソッド」の特徴であるが、学習効果に関しても、その科学的裏付けにムネーメ理論が援用されているのである。

【ホルメ】

モンテッソーリはここでも「ある行為を成し遂げたいという無意識の衝動」をホルメと呼んでいる。ムネーメとの関係で言えば、ホルメは「エングラムを蓄積するためにあらゆる生物を経験へと駆り立てる衝動」とされる。つまりホルメは、ムネーメを経験によってより豊かなものにするための原動力とされるのである。さらにモンテッソーリは、ホルメはベルクソンの「エラン・ヴィタルの一部に当たる」³³⁾とも言う。これはまた、ニーチェにはまったく触れることなく、「生への意志」(“Will to Live”)³⁴⁾とも呼ばれている。ホルメが衝動であるならば、これもムネーメ同様、意識的な領域に限定されず、例えば説明のつかない、非合理的行動を惹起する可能性もある。その意味ではホルメは「人間性にとって危険」³⁵⁾と感じられるものでありうる。この危険性を理解し、それに対して自らを守るような成長を促すことがモンテッソーリのメソッドだと言われる。それは「意識をはじめから正しく (from the first rightly)」³⁶⁾発達させ、訓練することによって達成されるとするが、この「正しく」とはどういう意味なのかは、まったく説明されていない。

なお、2冊の著書においてモンテッソーリ自身はホルメをこれ以上詳しくは説明していないが、この術語についてはより仔細に吟味する必要があると思われる。

もともとホルメ (古代ギリシア語では *Ὁρμή*) は活発な活動、行動を始めること、特に戦闘における突進を人格化した精霊で、その祭壇をアテネに持っている。この語が心理学や教育学の術語となったことには、ユングが関係している。

ユングは1912年あたりから、フロイトの「リビドー」とベルクソンの「エラン・ヴィタル」の概念を比較する中で、前者を後者の「ひとつの現れとして」(as one

31) Ebd., S. 13.

32) Ebd., S. 14.

33) Ebd., S. 14.

34) Ebd., S. 14.

35) Ebd., S. 14.

36) Ebd., S. 14.

manifestation) として捉えようとした。それは「リビドー」が専ら性的なエネルギーと理解されるのではなく、「生のエネルギー全般」(vital energy in general)³⁷⁾と捉えられるべきであるという文脈においてであった。ユングはさらに、1914年7月24日にロンドンの心理医学協会で行った講演で、「リビドー」という言葉が英語では「誤解されている」として、その代わりにまさにこの「ホルメ」(hormé)と言い換えてはどうかと提案した。それに加えて「ホルメはベルクソンの『エラン・ヴィタル』のコンセプトと関係している」(Hormé is related to Bergson's conception of 'élan vital')³⁸⁾とも述べている。もっともユングは、ドイツ語の著作ではその後も「リビドー」を使い続け、ユングの英訳でも「ホルメ」は全く出てこないようである。この語は、ユングが英語で講演原稿を書く際に時々使用されただけであった。³⁹⁾

「ホルメ」概念はしかし、イギリスの教育学者パーシー・ナン卿 (Sir Thomas Percy Nunn; 1870-1944) や、とりわけイギリスの心理学者ウィリアム・マクドゥーガル (William MacDougall; 1871-1938) によって受け入れられ、マクドゥーガルはのちに自らの心理学を「ホルメ的」(hormic)⁴⁰⁾と性格づけることになる。モンテッソーリはナンやマクドゥーガルからこの語を導入したようである。⁴¹⁾

37) Sonu Shamdasani: *Jung and the Making of Modern Psychology. The Dream of a Science*. Cambridge University Press, London 2003. S. 227.

38) Ebd., S. 228.

39) Ebd., S. 228.

40) Ebd., S. 228.

41) これに関してはマリア・モンテッソーリ:『子どもの心——吸収する心』国土社、鼓常良(訳) 1974年(初版1971年) 94頁参照。ここでモンテッソーリはホルメ概念がパーシー・ナンによるものであると書いているが、ユングに遡るべきである。なお同書71頁ではムネーメもパーシー・ナンによって「特別の名称を与えられ」たことになっているが、これはモンテッソーリの誤りで、正しくはゼーモンである。なお1946年の *Education For A New World* では「この種の記憶を心理学者たちはムネーメ (the Mneme) と呼んでいます」とのみ記述され(注14参照)、ここでもゼーモンの名は出てこない。「心理学者たち」でモンテッソーリが指していたのは、ナンやマクドゥーガルである可能性が高い。さて、『子どもの心——吸収する心』のオリジナルは Maria Montessori: *The Absorbent Mind* というタイトルで、1949年に最初はインドにおいて出版された。しかしモンテッソーリはイタリアに帰国後、それを母語であるイタリア語に書き直した。その際かなり手が増えられたという。それが *La mente del bambino. Mente assorbente*. 1952 である。インド本の編集者は、そのイタリア語をさらに英訳したという。これが Maria Montessori: *The Absorbent Mind*. Translated from the Italian by Claude A. Claremon. 1967 である。国土社版の訳者はドイツ文学者の鼓常良である。明確には書いていないのだが、某オスワルド氏がイタリア語版と英語版を参照しながらドイツ語版を作ったことであるから、鼓はこのドイツ語版を日本語訳した可能性が高い。このように何度も重訳されたもので、細かいニュアンスなどは何が正しいのか判然としない。しかし重訳の過程で人名が変わるとは考えられない。つまり、いずれにせよ、モンテッソーリがホルメ概念を(またムネーメ概念も)パーシー・ナンら、イギリスの学者から学んだことは確かであろう。

【観念の連合】

第3の「観念の連合」ないし「思考の継続的形成の原理」は、モンテッソーリによると、「あらゆる教育がこれに基づく」ものであって、「ある最初の観念の周りに、より多くの観念が、当の最初の観念に合うように、あるいはまったく対立するように、集まって来る」⁴²⁾ことを指す。モンテッソーリはしかし、これをあまり評価しない。このような「観念連合」は「二次的な重要性」しか持たず、「表面的に正しい」⁴³⁾だけであって、ムネーメ的な「エンGRAM連合」のほうがより強力であると言うのである。「エンGRAM連合」は「自発的で、どの観念の鎖よりはるかに活発で力強く、長続きする」。⁴⁴⁾例えば数学の難問に遭遇した学生が、「一晩寝てから考えよう」(“sleep on it”)と決めたところ、翌朝には「すでに精神の中で、その問題が解かれていることを発見」することがある。これは「エンGRAMが眠らずに連合して作業をし、それを意識の中に流し込んだ」⁴⁵⁾からかもしれない。これら「心的複合」(psychic complexes)である「エンGRAM連合」は、いわば意識を超えた自己組織化であり、インスピレーションを生むが、⁴⁶⁾これこそが「教育の中で非常に重要なもの」⁴⁷⁾とされるのである。

3. 「モンテッソーリ・メソッド」におけるムネーメ

これまでの分析の概要をまとめる。「モンテッソーリ・メソッド」においてムネーメは、意識にのぼるわずかな記憶が氷山の一角であるとすれば、その下に広がる意識下の膨大な記憶そのもの、ないしそれをアーカイブしている記憶庫を意味していた。子どもには「言語、感覚、運動、数、文化」、さらには「秩序、小さいものへの関心、礼儀と作法」に至るまで、意識下での精神的吸収が爆発的に遂行される「敏感期」があることをモンテッソーリは観察していたが、まさにこの「敏感期」に吸収されたもの、ないしそれを記憶しておく能力がムネーメであると考えたのである。それぞれの「敏感期」に、幼児期ならではの旺盛な吸収力であ

42) Maria Montessori: *To Educate The Human Potential*. 1989. a. a. O., S. 14.

43) Ebd., S. 15.

44) Ebd., S. 15.

45) Ebd., S. 15.

46) いわゆるインスピレーションやアイディアの創発に記憶の連合が関わっていることは、現在の記憶研究ではほぼ間違いないとされている。モシェ・バー：『マインドワンダリング さまよう心が育む創造性』横澤一彦（訳）、勁草書房、2023年、39頁以下参照。人の経験や知識の記憶は巨大なノード（結節点としての概念）のウェブ（網）でできているが、それらの記憶が神経的に高度に連結し、連想が起ることによって「並外れた洞察力」が発揮されたり、「独創的な問題解決」（同書41頁）が遂行されることがあるという。

47) Maria Montessori: *To Educate The Human Potential*. 1989. a. a. O., S. 15.

る「無意識的吸収精神」に数多くの「種をまく」という「モンテッソーリ・メソッド」の理論的支柱は、ゼーモンの「ムネーメ理論」であると言ってよいであろう。

また、著書『人間の可能性を伸ばすために』でモンテッソーリが挙げた「無意識についての新しい心理学」の「三つの主要な精神的要素」すべてに、ムネーメは密接に関わっていた。まずムネーメ自体が、それら三つの要素のひとつであることは言うまでもない。二つ目の要素であるホルメは、経験、すなわちエングラムの蓄積によってムネーメをより豊かにするために、「生物を経験へと駆り立てる衝動」であった。またムネーメに蓄積されたエングラムが行う連合は、観念連合よりも深部で進行する、インスピレーションの母体となる意識下の自己組織化であった。

もっともムネーメという生物学的概念を教育学に導入することによってモンテッソーリは、もしも幼児期にムネーメの獲得に失敗すれば、その子どもは「弱い人間として成長」し、文明の発展に対する危険になるといった、生物学的決定論と社会ダーウィニズムに加担するような主張をすることとなった。このようにムネーメ理論の援用は「モンテッソーリ・メソッド」に一見科学的な根拠を与えた一方で、教育へ生物学的決定論を持ち込む危険と限界をも招来した。その点で諸刃の剣であったとすることができる。

この生物学的決定論以外にも「モンテッソーリ・メソッド」には、危うさが感じられる。例えば「秩序への敏感期」や「礼儀と作法の敏感期」について、そこで吸収されるために提供されるものの内容と目的については、時代や政治、宗教などのイデオロギーに左右されざるをえないであろう。

フックスによれば、ラディカルな批判者は、「モンテッソーリ・メソッド」に「隠れた権威主義と決定論」⁴⁸⁾を嗅ぎ取っているという。本稿では取り上げなかったが、モンテッソーリのホリスティックな宇宙観がいわゆる「物理神学」(Physikotheologie)と「神智学」(Theosophie)⁴⁹⁾に根差しており、科学的な妥当性に議論があること、またその言説が過去を称賛するような憧憬に満ちていることから、彼女の同時代の世界観から見ても時代遅れであったことなどが指摘されている。さらに、先述したようにモンテッソーリには進化論的な思考が強いが、エルンスト・ヘッケル

48) Brigitta Fuchs: *Maria Montessori. Ein pädagogisches Porträt.* a. a. O., S. 150.

49) Ebd., S. 150. 一般的な定義を付す。物理神学は自然神学とも呼ばれる。これは神の存在をその創造物である自然 (physis) の奇跡において証明しようとする神学を指す。カントは『判断力批判』 (§85) においてこのような「神の存在証明」を批判し、神を排除した自然科学が基礎づけられることになる。「神智学」は世界の構造と其中的人間存在の意味を、神の意志の実現過程であるとし、その実相を神秘的観照によって認識しようとする立場である。以上2項目に関しては、主として『岩波 哲学・思想事典』第三版、2004年を参照した。

でも理想とされたアリの社会⁵⁰⁾を規範とする「自然に」(natürlich)⁵¹⁾成長してきた社会を理想としており、権力と支配といった政治的側面に関してあまりにナイーブなのではないかという批判は免れまい。

50) ヘッケルはそのベストセラー『宇宙の謎』で、アリやハチのような社会的昆虫の社会を、人間も目指すべき共同体の理想としている。Ernst Haeckel: *Die Welträtsel. Gemeinverständliche Studien über monistische Philosophie*. Nachdruck der 11. verarb. Auflage. Kröner, Stuttgart 1984. S. 445. これについてはまた福元圭太:『賦霊の自然哲学』九州大学出版会、2020年、290頁以下、また302頁注(57)を参照。

51) Brigitta Fuchs: *Maria Montessori. Ein pädagogisches Porträt*. a. a. O., S.151.

Mneme und Erziehung

– Zur Rolle von Richard Semon in der „Montessori-Methode“ –

Keita FUKUMOTO

Dieser Artikel untersucht die Rezeption und Anwendung von Semons „Mneme-Theorie“ in der auf die Pädagogin Maria Montessori zurückgehende „Montessori-Methode“, um auf diese Weise einen Aspekt von Semons Einfluss auf die Nachwelt darzulegen.

Im Rahmen der „Montessori-Methode“ bedeutet Mneme ein riesiges unbewusstes Gedächtniskorpus, das unter der Bewusstseinsoberfläche liegt. Was das Gedächtnis angeht, so ist für Montessori das Bewusstsein nur die Spitze des Eisbergs. Sie beobachtete bei Kindern nämlich sogenannte „sensible Perioden“ (sensitive periods), in denen es zu einer explosiven, unbewussten psychischen Aufnahme von „Sprache, Sinnen, Bewegung, Zahlen, Kultur“ und sogar von „Ordnung, Interesse an kleinen Dingen, Höflichkeit und Umgangsformen“ kommt. Montessori verstand unter Mneme sowohl das, was in diesen sensiblen Phasen aufgenommen werde, als auch die Fähigkeit, dieses zu speichern. Nach Montessori besitze die Psyche der Kinder in diesen „sensiblen Phasen“ eine unbewusste intensive Aufnahmekraft. Daher sei es in dieser Periode die Pflicht der Pädagogen, zur Bereicherung des unbewussten Gedächtnisses der Kinder dieses mit möglichst „zahlreichen Samen“ zu versorgen. In diesem Sinne kann die Mneme von Semon als die theoretische Grundlage der „Montessori-Methode“ angesehen werden.

In ihrem Buch *To Educate The Human Potential* geht Montessori auf die „drei wichtigsten psychischen Elemente“ der neueren Psychologie des Unbewussten ein. Die Mneme selbst ist eines dieser drei Elemente. Das zweite Element „Horme“ ist der „Drang, das Lebewesen zur Erfahrung zu treiben“. Durch die Erfahrung werden die „Engramme“, aus denen die Mneme besteht, angesammelt. „Horme“ ist also die Antriebskraft, mit der die Mneme durch die Ansammlung von Engrammen bereichert wird. Das dritte Element sind die Assoziationen der in der Mneme gespeicherten Engramme. Sie stellen eine unbewusste Selbstorganisation dar, die tiefer als die Ideenassoziationen verläuft und die Grundlage für Inspirationen bildet.

Indem Montessori aber das biologische Konzept der Mneme in die Pädagogik einführt, läuft sie Gefahr, den biologischen Determinismus und Sozialdarwinismus zu unterstützen. Denn sie vertritt die Ansicht, dass ein Kind, das im frühen Kindesalter qualitativ und quantitativ keine gute Mneme erwirbt, als „schwacher Mensch“

aufwachsen müsse und damit zu einer „Gefahr für die Entwicklung der Zivilisation“ werde. Auf diese Weise bietet die Anwendung der Mneme-Theorie in der „Montessori-Methode“ eine scheinbar wissenschaftliche Grundlage. Allerdings birgt diese Anwendung auch die Gefahr, einen biologischen Determinismus in die Pädagogik einzuführen. Insofern stellt die Anwendung der Mneme-Theorie Semons in der Pädagogik ein zweischneidiges Schwert dar.